

# 日本語ワープロソフトの機能に見る異文化

## － *Word* と一太郎の比較文化論－

松原 健二・矢野口 聡

### 〈 目 次 〉

#### 第1章 はじめに

#### 第2章 日本語ワープロの歴史

#### 第3章 *Word* と一太郎の機能比較

#### 第4章 機能の差異を生む発想の相違

##### 4.1. 一太郎に見られる原稿用紙的発想

##### 4.2. *Word*に見られる英文タイプライターの発想

#### 第5章 日本語ワープロの比較文化論

## 第1章 はじめに

産業革命に端を発する現代の機械化社会において、我々を取り巻くさまざまな電気・電子機器は日進月歩の進歩を遂げている。職場で使われるビジネス機器をはじめ、一般家庭で用いられる家電製品にしても、毎年のようにモデルチェンジを繰り返し、その度に新たな機能が加わって「より速く」、「より便利」になって行く。そして、機能の高速化、操作手順の簡略化、機能の高性能化という点において、最も顕著にその傾向が認められるのが、コンピュータであると言っても過言ではないであろう。

小論でテーマとして取り上げる日本語ワープロの分野においても、1970年代末に登場した大型の日本語ワープロ専用機に始まり、コンピュータのOS上で作動する日本語ワープロソフトに至るまで、この約30年の間にそのワード・プロセッシングの基本的な機能（辞書・変換・作成）が格段の進歩を遂げてきたことに異論の余地はない。今やビジネスの場だけに留まらず、日本語ワープロは日本人の日常生活にとってなくてはならない生活必需品のひとつとしての地位を確立していると言えるだろう。

さて日本語ワープロの歴史は、文字体系が複雑で難解な日本語という言語をいかに速く簡単に紙の上に現出させるかという課題への挑戦であったとすることができる。「ひらがな・カタカナ・漢字」という3種類の文字体系を持つ日本語は、日本語ワープロの開発・製作に携わる技術者たちにとって、とてつもない怪物であったのである。しかしこの30年間で、日本語ワープロは基本的な文書作成機能に留まらず、さまざまな付加的な機能（文字装飾／罫線作成／レイアウト調整／イラスト挿入／表作成／データベース／通信機能 etc.）を具備した高度な電子機器となった。そしてその多機能化に伴い、操作面でも次々と改良・改善が施され、より簡単に、より美しい日本語文書が作成できるようになってきたのである。現段階における日本語ワープロを概観してみても、その具備する機能は至れり尽せりの感があり、操作手順の簡略化も進んでいるが、このような改良や改善は今後も続いて行くに違いない。

けれどもそれらのさまざまな機能を、日本語ワープロのユーザたちが必ずしも高く評価し、有り難いと思っているとは限らない。もちろん個人差はあるものの、多くの日本人があまり良いとは思わなかったり、却って煩わしく感じている機能さえも存在するのである。そしてそのような傾向は、特に *Word* というワープロソフトにおいて顕著であると思われる。コンピュータのOS上で作動する日本語ワープロソフトとして、*Word* は現代日本におけるリーディングソフトであるが、Microsoft というアメリカ企業が英文ワープロをベースに製作したという開発の歴史的特徴ゆえに、必ずしも日本人ユーザたちに好意的に受け入れられてはいない機能も具備している。

小論では、アメリカ生まれの日本語ワープロソフト *Word* と日本生まれの日本語ワープロソフト一太郎を、機能面において比較分析する。そして両者の間に機能面におけるさまざまな相違点が生まれた背景には、英文タイプライターから英文ワープロを経て作られた *Word* と、タイプライターという段階をほとんど経ずに純粋に日本語ワープロソフトとして作られた一太郎との間の、生い立ちの相違に基づく発想の差があることを検証する。そして、*Word* と一太郎との機能面の相違が単に表面的な差異ではなく、それぞれのルーツそのものに起因する深い文化的な問題であることを論証して行く。

## 第2章 日本語ワープロの歴史

まずは、*Word* と一太郎の日本語処理における発想の違いが、その生い立ちにあると考えられることから、日本語ワープロの歴史を見て行くことにしたい（表1参照）。

世界初のワープロは、1964年にアメリカのIBMが開発した *MT/ST* (Magnetic Tape Selectric Typewriter) だと言われている。*MT/ST* はIBMのタイプライター *Selectric* シリーズに磁気テープの記憶装置を搭載し、入力内容をデータ保存して編集可能としたものであった。キー入力内容が

即時に印字されるタイプライターと区別できることから、これをワープロの起源としている。MT/STの後継機には磁気カード搭載機やFDD搭載機も開発された。1970年代後半になると、汎用コンピュータやミニコンを用いた主装置と複数の端末を同軸ケーブルで結んで複数ユーザの利用を可能としたマルチユーザシステムがWangから登場し、1976年発売の1200WPSや1977年のWangOISが人気を博した。

1980年に、IBMから単体で動作するワープロ専用機DisplayWriterが開発されて一時市場を独占していたが、IBM-PCが登場するとDisplayWriteという製品名でPC向けにも移植され、その後PC上で動作するワープロソフトの開発が盛んとなっていく。WordStarやWordPerfectが現れたのもこの頃で、中でもMicroproのWordStarは、アメリカにおいてPCワープロのデファクトスタンダードとしての地位を獲得し、WordStarが採用していたカーソル移動方式は、その後の多くのワープロやテキストエディタに影響を与えた。WordStarは、その後DisplayWriteの機能を取り入れて操作体系を一新したWordStar 2000へとバージョンを上げるが、従来製品のユーザには不評で、Wangの操作体型を取り入れたWordPerfectに市場を奪われた。

1983年には、MicrosoftがWordの前身となるMulti-Tool WordをXenix（Microsoftが開発したマイコン用UNIX）向けに発売した。インターフェースには、この時同時発売となったMicrosoft Mouseというマウスを用いて操作するGUI(Graphical User Interface)を採用し、ディスプレイに表示されたものと印刷結果を一致させるWYSIWYG(What You See Is What You Get)の技術も取り入れられていた。また、この開発で蓄積したライブラリは、その後登場するMS-Windowsの開発にも使われた。

一方、日本語ワープロは、漢字の入力や印刷の仕組みの複雑さから製品化までに時間を要したため、その第1号機が登場したのは1977年であった。この年のビジネスショーに出展されたミニコン上で動作するシャープのワープロ機は商品化には至らなかったが、ELパネルを用いたディスプレイ、インクジェットプリンタ、かな漢字変換で入力するキーボードなどが搭載されており、現在のワープロの原型が出来上がっていたようだ。

日本語ワープロが市場に登場したのは1979年で、同じくミニコン上で動作する東芝のJW-10であった。文節指定入力のかな漢字変換方式で、ハードディスク上の標準登録辞書には普通単語54,000語、固有名詞8,000語が登録されており、ユーザ登録辞書には普通単語10,000語、固有名詞8,000語が登録できたが、重さが80kg、価格は630万円と大型で高額なものであった。

1980年には富士通のOASYS、日本電気のNWP、キャノンのキャノワードなど、国内のメーカー各社からワープロ専用機が続々と発売された。1982年には、FDDとプリンタ、ディスプレイを一体化した、重量11.5kg、価格59万8千円という初の卓上型機JW-1が東芝から発売され、それ以降ワープロの軽量化、低価格化が急速に進んでいく。1985年までの短期間で生産台数は約100万台に達し、販売価格は10万円を切るまでとなった。この時期の普及型ワープロは、3.5インチFDDと24ドット熱転写プリンタが搭載された卓上一体型の機種が主流で、低価格化によって一般家庭への普及が始まった頃であった。

1980年代後半になると、3万円台の機種も登場して各社の価格競争が激しくなる一方、1987年発売のキャノンキャノワードα10搭載の4色カラー熱転写プリンタや、シャープWD-850搭載の大型液晶、1988年発売の東芝JW-1000AIのAI（人工知能）推敲機能など、独自機能を持たせた機種も現れ、ワープロ専用機的全盛期を迎える。1989年には年間出荷台数271万台、累計販売台数1,000万台を突破した。

PC上で動作する日本語ワープロが登場するのは、高電社のマイルター、ReedRexの万葉、エイセルのJWORDが発表された1982年であった。1983年にはジャストシステムの開発で一太郎の前身となるJS-WORDが、ASCIIのブランド名でNEC（日本電気）のPC-100のバンドル製品という形で登場する。PC-100はPC-9801と同時期に開発されたPCであったが、MS-DOS上で動作

する VShell(Visual Command Interface)と呼ぶ GUI を備えていた。この GUI は現在の Windows の原型ともいえるインターフェースで、マウス操作、マルチウィンドウなどの機能を持ち、JS-WORDはこの GUI 上でアイコン表示やプルダウンメニュー表示を可能とした。しかし、このインターフェースは先進的すぎたためか、その7ヶ月後に出した PC-9801対応の JS-WORD Ver.2と共に日本国内の PC ユーザには受け入れられなかった。

そこで、ジャストシステムは1984年にインターフェースを CUI(Character User Interface)に一新した jX-WORDを IBM の JX シリーズ向けに発売し、翌年には PC-9801対応の jX-WORD 太郎を発売した。この時に作られたマウス無しで操作する ESC メニューの方式がユーザに受け入れられ、jX-WORD 太郎は発売5ヶ月で9,700本を売り出すベストセラーとなった。ESC メニューは現在のバージョンに至るまで搭載され続けている。その後、日本語入力部分を FEP(Front End Processor)化するなどの改良を加えた一太郎を発売し、以後その製品名でバージョンを重ねていく。

この時期に一太郎と市場を二分したのが、1983年に管理工学研究所が開発した松であった。松は、機能を絞ってアセンブラでコーディングすることでメインメモリ128KBのPCでも軽快な動作を実現した。これが文書や仕様書などを大量に打ち込むヘビーユーザに歓迎され、最盛期には PC-9801の出荷台数の25%にインストールされたようだ。しかし、PCの性能が上げるにつれ、ユーザは多機能の一太郎へとシフトしていった。

1990年前後におけるPCの国内シェアは、NECのPC-9801シリーズが約50%を占めていた。「PC-9801+MS-DOS+一太郎」の組み合わせがPCのデファクトスタンダードと言われ、一太郎がPC用ワープロソフトの市場を圧倒していた。1993年にMicrosoftからMS-Windows3.1が発売されると、ジャストシステムはMS-DOS版の一太郎5をWindows用に移植し、これも順調に売上げを伸ばしていった。Microsoftも同年にWindows版Word5を発売したが、日本語入力システムであるMS-IMEの変換性能が貧弱で、ルビなどの日本語独自機能を備えていなかったため、一太郎が持つ市場を切り崩すことができない状況にあった。

Microsoftは日本語処理技術の向上を重要視し、Wordの日本語処理システムの水準を上げるための開発に注力していく。そして、1995年にWord95をWindows95と同時発売した。Word95はExcelとの連携機能を売りに、プレインストールソフトという販売形態で法人市場を中心に巻き返しを進めていく。Word95の日本語処理機能は突貫で追加した感があり、次のバージョンのWord97ではユーザからバグがあるとの指摘を受ける程の品質であったため、翌年Wordのみを98バージョンとして販売した。Word97以降の製品は、MS-Officeという形でパッケージ販売もされるようになったが、MS-Office97にはWord97同梱製品とWord98同梱製品がある。

Word97以降、Wordの機能は一太郎に近づいていくが、それ以上の早さで一太郎とWordのシェアは逆転していく。そして数年にしてWordはコンピュータのOS上で作動する日本語ワープロソフトとしてのリーディングソフトの地位を確立して行くのである<sup>1)</sup>。しかし、ここで確認しておきたい重要な点は、一太郎が純粋な国産ワープロソフトとして開発されたのに対し、Wordは既存の英文ワープロソフトである米国版Wordをベースにして、それを改良する形で日本語ワープロソフトに作り替えられたという開発の経緯である。両者は同じく日本語ワープロソフトでありながら、その開発のされ方には大きな相違があったのである。

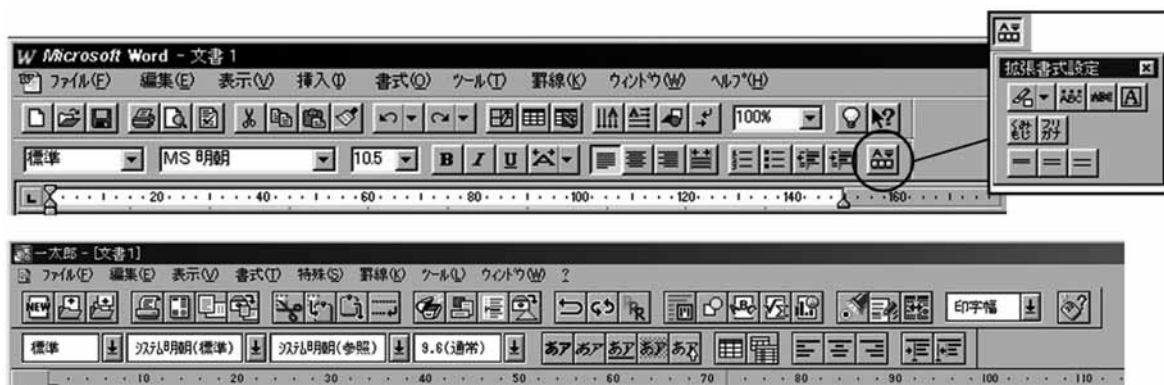
(表1) 日本語ワープロの歴史

| 西暦                           | 日本語ワープロ   |   | 英文ワープロ   |
|------------------------------|---|---|--|
|                              | ワープロ専用機   | ワープロソフト   |  |
| 1964<br>1976                 |   |   | MT/ST (IBM、専用機)<br>1200WPS (Wang、専用機)<br>WordStar for CP/M (Micropro)<br>WangOIS (Wang、専用機)<br>WordStar1.0 for CP/M (Micropro)<br>WordStar for TRS-80 LDOS (Micropro)<br>DisplayWriter (IBM、専用機) |
| 1977<br>1978<br>1979<br>1980 | ワープロ試作機 (SHARP)<br>JW-10 (東芝)<br>OASYS100 (富士通、親指ジョystick搭載)、Lettermate80 (OKI)、<br>NWP-20 (NEC)、キャノワード55 (Canon)   |   |  |
| 1981                         | BW-20 (日立)、RIPORT600/400 (RICOH)、WP-1 (CASIO)、<br>パナワード1000 (松下電器)  |   | DisplayWrite for IBM-PC (IBM)<br>WordPerfect1.0 (WordPerfect、ミニコン)<br>WordStar for Epson PC (Micropro)<br>WordPerfect2.2 for IBM-PC (WordPerfect)  |
| 1982                         | WD-1000 (SHARP、ペンタッチ方式コンパ外型)、<br>Lettermate800 (OKI、グラフ機能、演算機能、通信機能)、<br>BW-10 (日立)、MyOASYS (富士通、100万円を切る価格)、<br>VWP-100 (NEC、音声入力機能)、JW-1 (東芝、卓上一体型)、<br>OASYS 100G (富士通、A4フルスクリーン表示CRT) | マイレター (高電社)<br><br>万葉 (ReedRex)<br>JWORD (エイセル)   | WordStar3.0 for MS-DOS (Micropro)  |
| 1983                         | WD-2400 (SHARP)、BW-30 (日立)、Lettermate85 (OKI)、<br>JW-7D (東芝)  | JS-WORD (ASCII、PC-100のベントソフト)<br>JS-WORD Ver.2 (ASCII)<br>松 (管理工学研究所)<br>弘法 (ReedRex)<br>JX-WORD (ジャストシステム)   | Multi-Tool Word for Xenix (Microsoft)<br>Word1 for MS-DOS (Microsoft)  |
| 1984                         | PWP-100 (NEC、M式キーボード搭載)、OASYS Lite (富士通、ボーダー型)、<br>WD-2000 (SHARP)、Lettermate8 (OKI、ボーダー型)  |   | Word1.1/1.15 for MS-DOS (Microsoft)  |
| 1985                         | HW-100 (CASIO)、HW-30 (SONY)、文豪mini3/5/7 (NEC)、<br>JW-R10/JW-8D11/JW-50F (東芝、全文変換機能、3.5インチFDD)、<br>OASYS 100R (日立、PC機能)  | JX-WORD 太郎 (ジャストシステム)<br>一太郎 (ジャストシステム)   | WordStar 2000 for DOS (Micropro)<br>WordStar 2000 for AT&T UNIX (Micropro)<br>Word2 for MS-DOS (Microsoft)<br>Word1 for Macintosh (Microsoft)<br>Word3 for MS-DOS (Microsoft)                    |
| 1986                         | HW-80 (SONY)、BW-150 (日立)、<br>OASYS 30AF/LiteF/ROM7/F/ROM9 (富士通、パソコン通信機能)  | 新一太郎 (一太郎2) (ジャストシステム)  |  |
| 1987                         | BW-1000 (日立、DTP機能)、WD-540、PJ-100 (SONY、2インチFDD)、<br>文豪mini7H (NEC、48ビットグラフィック)  | 一太郎3 (ジャストシステム)   |  |
| 1988                         | JW-1000AI (東芝、AI推論機能)、HW-7 (CASIO)、<br>WV-500 (SHARP、A4ノート型)、文豪3VIIEX/文豪3MII (NEC、AI機能)   | 新松 (管理工学研究所)  |  |
| 1989                         | PJ-1000 (SONY、表計算、グラフ機能)、BW-LF500 (日立)、<br>OASYS 30LX (富士通、ラップトップ型)、OASYS 30AD (富士通、ノート型)、<br>文豪mini7HR (A4フルページ表示12インチCRT)、WD-1800 (SHARP)   | 一太郎4 (ジャストシステム)<br>Word for Windows 1.0 (Microsoft)   | Word5 for MS-DOS (Microsoft)<br>Word for Windows 1.0 (Microsoft)   |
| 1990                         | DTP-7000 (東芝、DTP機能)、文豪mini (NEC、大型液晶)、<br>WD-A340 (SHARP)、BP-10 (日立、A4ノート型)   |   | Word for Windows 1.1a (Microsoft)  |
| 1991                         | BW-TH910/LH910 (日立、HDD内蔵)、文豪mini5RC (NEC、自動給紙)、<br>OASYS Pocket (富士通、530g)、JW98UP (東芝、Lotus123搭載)、<br>BF-1 (日立、プリンタ分離型1.8kg)  | Word for Windows 1.2 (Microsoft)<br>日本語MS-Windows3.0発売  | WordStar for Windows1.0 (Micropro)   |
| 1992                         | 文豪mini5SH (NEC、カラープリンタ搭載)、<br>BW-LH550 (日立、HDD内蔵ラップトップ)   |   | Word for OS/2 1.1B (Microsoft)   |
| 1993                         | JW04N (東芝、ブック型)、BF-60 (日立、文字変形機能)、<br>BW-TH960M (日立、DTP機能、ワイド搭載)  | 一太郎5 (ジャストシステム)<br>日本語MS-Windows3.1発売<br>Word for Windows 5 (Microsoft)<br>一太郎5 for Windows (ジャストシステム)<br>Word for Windows 6 (Microsoft)  | Word6 for MS-DOS (Microsoft)   |
| 1994                         | OASYS 30-API01 (富士通、HDD搭載)、文豪mini5ZY (NEC、ビデオ入力機能)、<br>BW PRO LN560M (日立、PCとのデータ互換機能)、<br>OASYS LX-3000 (富士通、タッチパネル方式)、<br>OASYS V (富士通、Windows3.1搭載)                                     |   |  |
| 1995                         | BF-220 (日立、カラー液晶、カラーインジェクションプリンタ)、文豪5SV (NEC、中国語グループ)、<br>BW-TH970M (日立、スキャナ、OCR機能)、OASYS LX-3500CT (富士通、フルカラースキャナ)、<br>JW-V700 (東芝、日英翻訳機能)   | 一太郎5 for Mac (ジャストシステム)<br>一太郎6/6.3 for Windows (ジャストシステム)<br>一太郎dash2 for Windows (ジャストシステム)<br>日本語MS-Windows95発売<br>Word95 (Microsoft)<br>一太郎7 for Windows95 (ジャストシステム)<br>一太郎7/R2 for Windows95 (ジャストシステム) | Word95 (Microsoft)   |
| 1996                         | WPC5000 (東芝、Windows3.1搭載)、JW-V610 (東芝、インターネット接続機能)、<br>WPC120 (日立、Windows95とのマルチOS)、BF-240 (日立、カラー液晶)、<br>JX70MA/50MA (NEC、インターネット接続、FAX、カラーコピー機能)  | 一太郎8 (ジャストシステム)<br>一太郎Note for Windows3.1/95 (ジャストシステム)<br>松風 (管理工学研究所)   |  |
| 1997                         | OASYS Mariott plus (富士通、インターネット、デジタルカメラ、スキャナ機能)、<br>JW-V850 (東芝、33.6kbpsモデム内蔵)、JX-S700 (NEC、マルチメディア機能)、<br>BW-CH700P (日立、インターネット、CD-ROM、PCカード)  | Word97 (Microsoft)<br>一太郎Lite (ジャストシステム)<br>一太郎9 (ジャストシステム)<br>Word98 (Microsoft)<br>一太郎10 (ジャストシステム)<br>Word2000 (Microsoft)   | Word97 (Microsoft)   |
| 1998                         | JX-A500 (NEC、12.1インチカラー液晶、インターネット、電話機能)   |   |  |
| 1999                         | JX-750 (NEC、音声認識、タッチパネル、ペンディスプレイ、インターネット、2枚同時印刷機能)<br>JW-G7000 (東芝、カラースキャナ、スマートメディア、カラーイメージ編集)  |   | Word2000 (Microsoft)   |
| 2001                         |   | 一太郎11 (ジャストシステム)<br>Word2002 (Microsoft)  | Word2002 (Microsoft)   |
| 2002                         |   | 一太郎12 (ジャストシステム)  |  |
| 2003                         |   | 一太郎13 (ジャストシステム)<br>Word2003 (Microsoft)  | Word2003 (Microsoft)   |
| 2004                         |   | 一太郎2004 (ジャストシステム)  |  |
| 2005                         |   | 一太郎2005 (ジャストシステム)  |  |
| 2006                         |   | 一太郎2006 (ジャストシステム)<br>Word2007 (Microsoft)  | Word2007 (Microsoft)   |
| 2007                         |   | 一太郎2007 (ジャストシステム)  |  |
| 2008                         |   | 一太郎2008 (ジャストシステム)  |  |
| 2009                         |   | 一太郎2009 (ジャストシステム)  |  |
| 2010                         |   | 一太郎2010 (ジャストシステム)<br>Word2010 (Microsoft)  | Word2010 (Microsoft)   |

### 第3章 Wordと一太郎の機能比較

前章で述べたように、日本語ワープロソフトは、1990年代前半まで一太郎を代表とする国産ワープロが主流であった。そこに英文ワープロの日本語版という形で Word が国内市場に加わった。両ソフトの比較をする際、同一のプラットフォームで動作する同時期のワープロソフトを取り上げるのが妥当であろう。Word の日本語版が登場するのは1989年の Word1.0 からであるが、一太郎にはまだ Windows 版が存在していなかった。また、当時の Windows3.0/3.1 は、MS-DOS 上で動くシェルという範疇を脱し切れていない中途半端なものであった。ネイティブなウィンドウ OS といえるのは Windows95 以降であるので、1995年に発売されていた Word95 と一太郎6 を中心に両ソフトの機能を比較してみる。

(図1) メニューの比較



まず、図1のツールボックスに並ぶボタン構成に注目する。デフォルトで表示されているボタンは、開発者からは使用頻度が高い重要な機能だと捉えていると見てよいだろう。メニューバーに注目すると、Wordの「挿入」に対し一太郎は「特殊」と名称が異なる部分はあるが、ほぼ同じ機能を表す項目が9種並んでいる。その下のツールバーに並ぶボタン数は、一見して一太郎6の方が数の多いことが分かる。多機能という点で一太郎が一歩進んでいると見て取れる。Word95では、段落番号、箇条書き、Excel ワークシート編集といったボタンが特徴的であり、一太郎6では、和文専用と欧文専用の2種に分けたフォント選択ボタンや網掛け等の文字飾りボタン、作画用ボタンと、種類が豊富である点が特徴的である。

次に、文字飾りについて比較してみると表2に示すような違いが見られる。中でも、両者ともあると思われた「網掛け」や「反転」が Word95 に無いのは意外である。また、Word95 には全角、半角を問わず英字を小型大文字や大文字にする設定項目があり、これは英文ワープロならではの発想から生まれたものであろう。

(表2) 文字飾りの違い

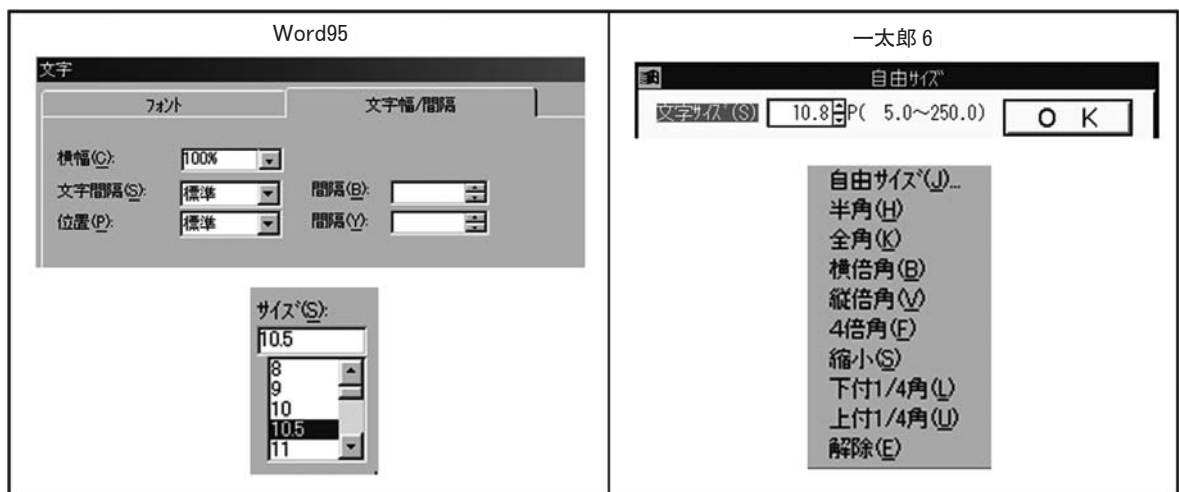
|        | 下線  | 傍点 | 隠し文字 | 小型英大文字 | すべて大文字 | 上付 | 下付 | 蛍光ペン | 網掛け | 飾り色 | 中抜き | 回転 | 反転 |
|--------|-----|----|------|--------|--------|----|----|------|-----|-----|-----|----|----|
| Word95 | 9種  | ○  | ○    | ○      | ○      | ○  | ○  | ○    | ×   | ×   | ×   | ×  | ×  |
| 一太郎6   | 15種 | ×  | ×    | ×      | ×      | ×  | ×  | ×    | ○   | ○   | ○   | ○  | ○  |

(図2) Word 特有の文字飾り



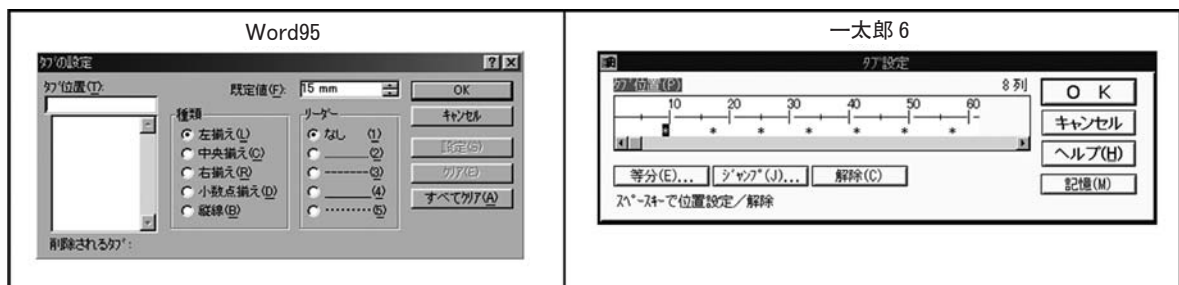
文字サイズの変更方法にはどちらも自由設定がある。これに加えて一太郎では倍角指定があり、Wordではパーセント指定がある。しかし、Wordのパーセント指定では横方向のみの変更しかできず、一太郎のような縦倍角や下付1/4角といった指定はできない。

(図3) 文字サイズ変更の比較



タブ設定についてはどうであろうか。図4に示すように、Word95はミリ指定（規定値15mm）で一太郎6は文字数（規定値8）で指定する。Wordではミリ単位で細かい調整ができるような構造となっている。

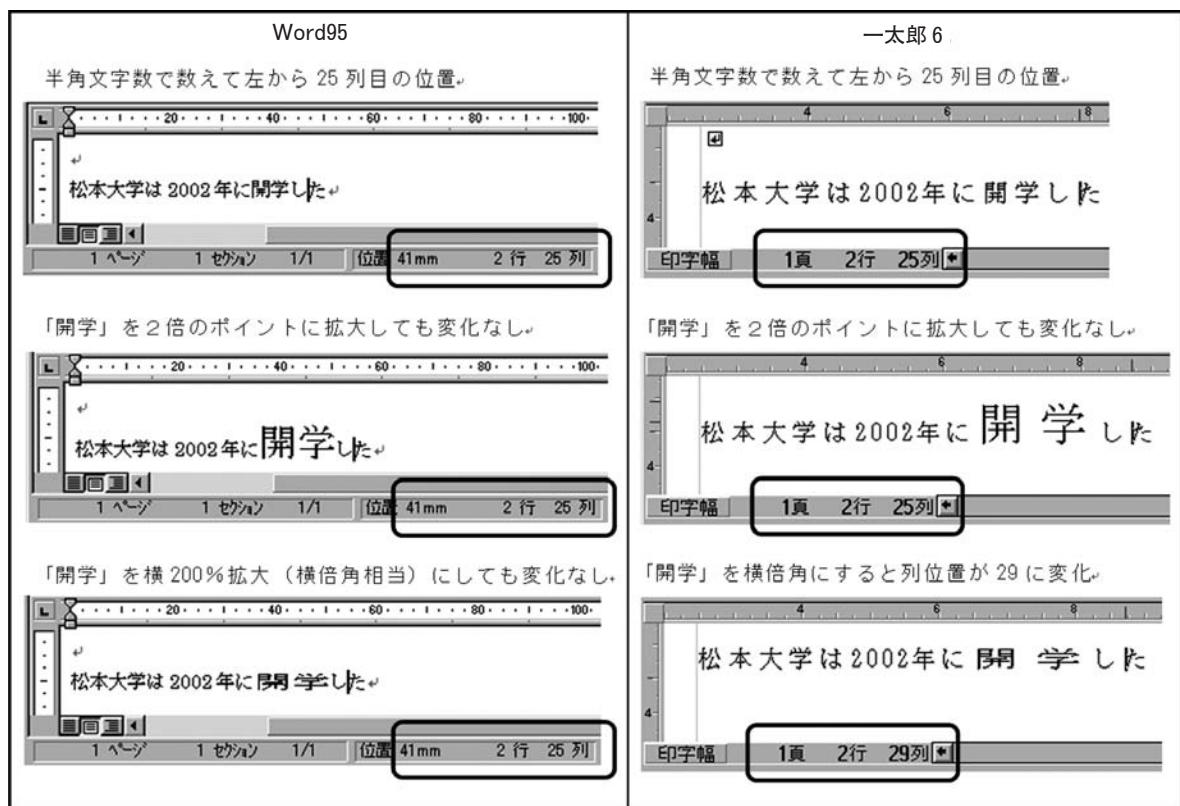
(図4) タブ設定の比較



また、ウィンドウ左下にあるステータスバーにはカーソル位置情報が表示されるが、Word95が「mm、行、列」と表示されるのに対し、一太郎6では「頁、行、列」と表示される。このうち、列の表示はどちらも半角1文字を1列としているが、一太郎6では横倍角文字にした場合に、その文字のカウント数も2倍となり、横倍角を2文字として扱っているところは独特のカウントの仕方である。この時期には、各社が独自の基準でカーソル位置情報を表しているが、これ以降のバージョンでは、Wordも一太郎も半角・全角を問わず1文字を1単位としてカウントしており、Wordでは「桁」と表し一太郎では「字」と表わしている。さらに、Wordでは用紙の上からカーソル行までの距離をmmで示しているのに対し、一太郎では頁位置のみを示している。これは、Word

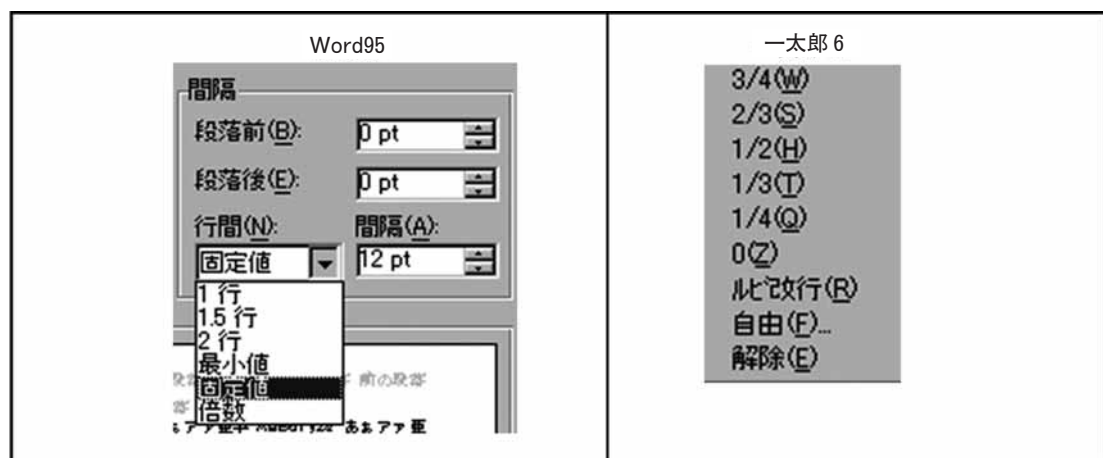
が *Multi-Tool Word* 時代からの WYSIWYG のコンセプトを引き継いでいる現れと考えられる。

(図5) カーソル位置情報の比較



改行の指定にも違いがみられる。一太郎6では通常行幅の何分の1という指定で変更するのに対し、Word95では行間をポイントで指定し、段落の前後の変更も可能となっている。このように、一太郎が文字や行を基準にパラメータ設定をするのに対し、Word95はポイントやmmなどの単位で設定することがわかる。

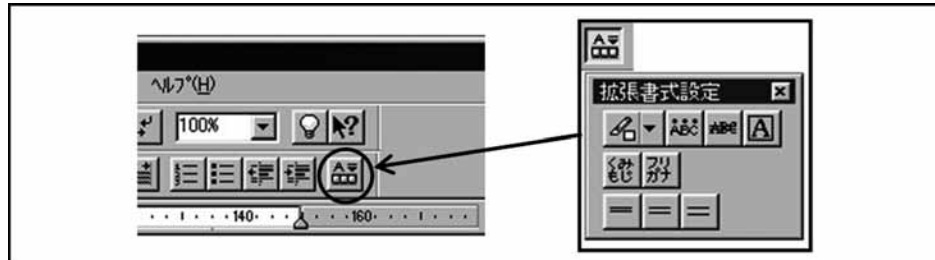
(図6) 改行幅変更の比較



「書式」にある機能を比較すると、一太郎6には「文字書式」の中にルビ設定項目があるが、Word95の「書式」には、それが見当たらない<sup>2)</sup>。別途用意された「拡張書式設定」ツールバーを開いてからルビ設定ボタンを押す操作となっている。この中には、他に蛍光ペン、傍点、二重取消線、囲み線、組文字、行間1/1.5/2を設定するボタンが用意されている。これらが次期バージョン

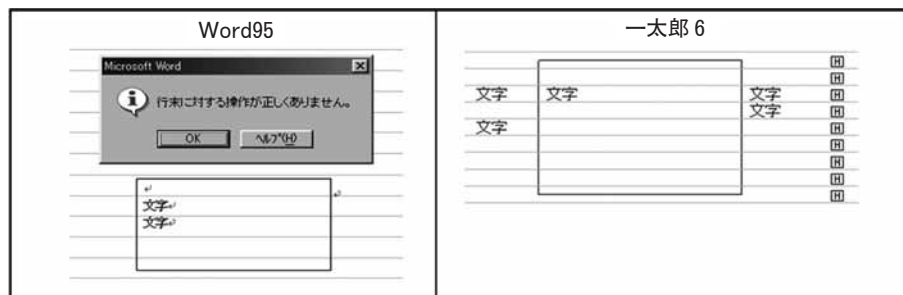
の Word97では「書式」メニューの中に組み込まれていることから、Word95開発の最終過程で追加されたものと判断することができる<sup>3)</sup>。

(図7) Word の拡張書式



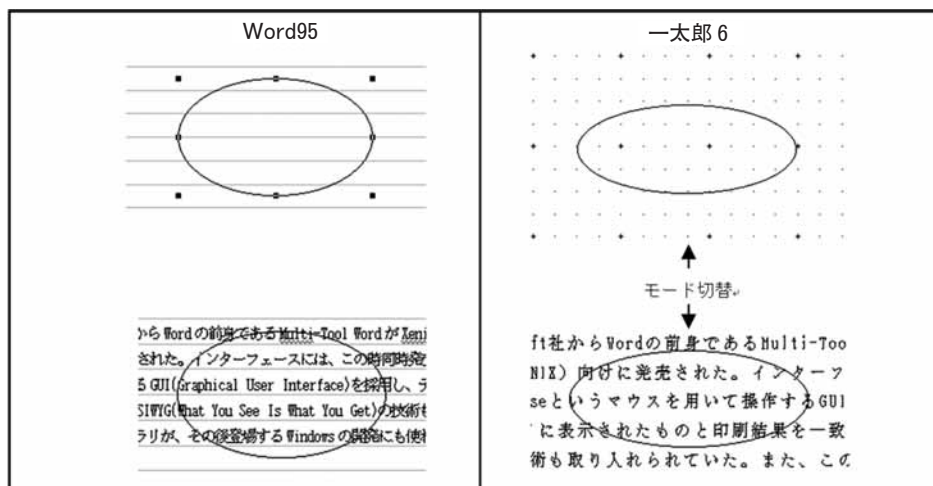
罫線や作図機能にも特徴的な差異が見受けられる。まず罫線であるが、Word95では始点と終点の指定方法に明確な規則性が見られない。任意の位置に罫線を引けるような動きをするのだが、厳密に言えばピクセル単位で細かく指定できない為、任意の位置を指定できるとは言えず、描画後の位置を微調整することも難しい。よく練れていないのではないかと思わせる操作性である。また、文字入力の有効範囲は枠の内側に限られ、その両側に文字を入力しようとすると警告メッセージが現れる。罫線は、短い線であっても描画するとページの横幅を丸ごと占有する。対して一太郎6では罫線を文字と同等に扱っており、行上もしくは行間に引くというルールが明確で、枠の両隣にも文字を入力することができる。

(図8) 罫線機能の比較



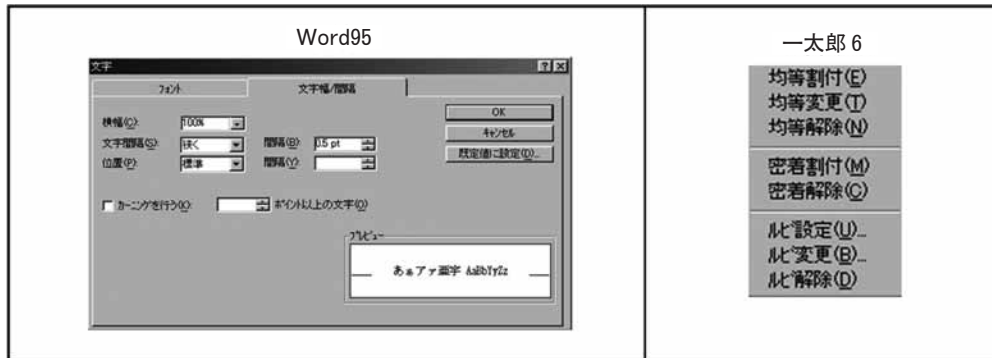
作図機能では、一太郎6が文字入力モードと作図モードを手動で切り替えながら作業を進めるのに対し、Word95ではモード切り替えを意識せずに連続的に操作することが可能となっている。また、文字と図形の重ね合わせは、どちらも自由に行うことができる。

(図9) 作図機能の比較



字間設定に関しては、Word95では字間ピッチの設定を0.1ポイント間隔で設定できる。対して一太郎6では、均等割付と密着割付しか見当たらない。ただし、Word95相当の字間ピッチ調整機能は一太郎7以降から追加されている。

(図10) 字間設定の比較

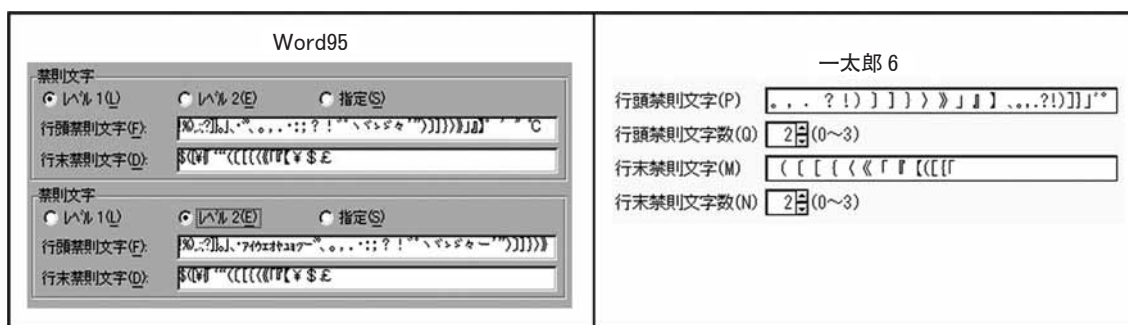


また、ルーラーの有無にも違いが見られる。Wordには初期のバージョンからルーラーが存在するが、一太郎ではバージョン7から搭載された機能で一太郎6には文字位置を確認するための桁ゲージがあるのみである。

多くのアプリケーションソフトでは、その動作を定める様々な設定項目が用意されており、メーカーがパラメータ等を調整して出荷している。既定値として定められた設定内容は、多くのユーザーにとって最も使い易い状態であると判断しているはずである。この設定ポリシーにメーカー間で違いがあるかどうかを見てみる。

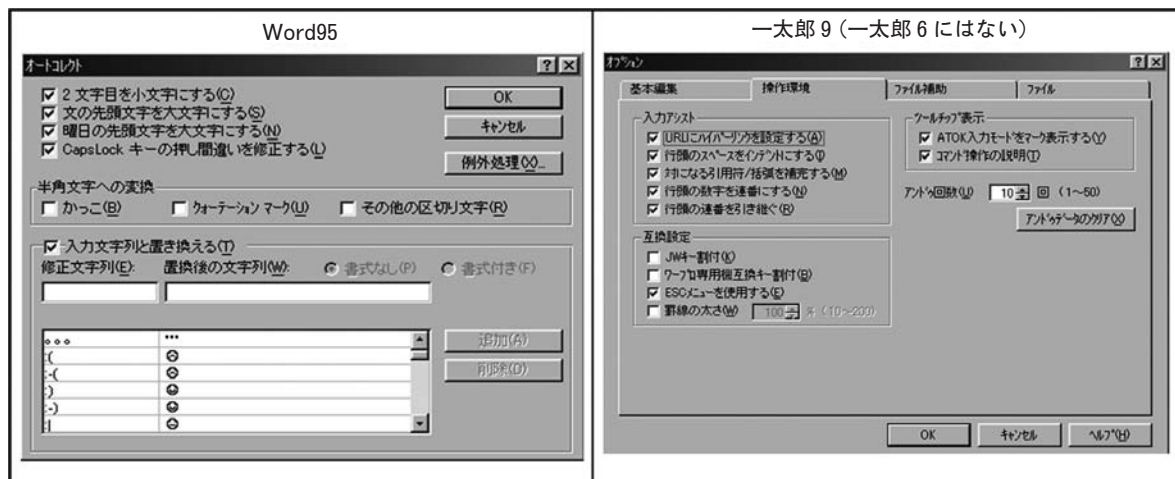
まず、禁則文字について確認してみると、一太郎が行頭文字26種、行末文字13種であるのに対し、Word95には2つのレベルがあり、行頭文字50～83種、行末文字20種とかなりの数が設定されている。

(図11) 禁則文字の比較



Word95には様々なオートコレクトと呼ばれる機能がある。これは、文字入力中に自動的に文字表記を修正する機能で、特定の種類の文書を作成する際に効率的に入力作業を進めることができるものである。文の先頭文字を大文字にする、2文字目を小文字にする、段落マークや箇条書きマークを付ける、といった操作をワープロ側で自動的に処理する機能であるが、この機能はWord95から採用されており、当初数種類であったものがバージョンを重ねるに従って増え続け、Word2007では約50項目にまで膨らみ、うち7割以上がデフォルトで有効の状態になっている<sup>4)</sup>。一方、一太郎6にはこのような機能は見られない。中でも連番記号は、記号を付ける機能はあるが自動入力機能が備わっていない。一太郎9になってから連番記号の自動入力が可能となるが、デフォルトでは無効となっている。

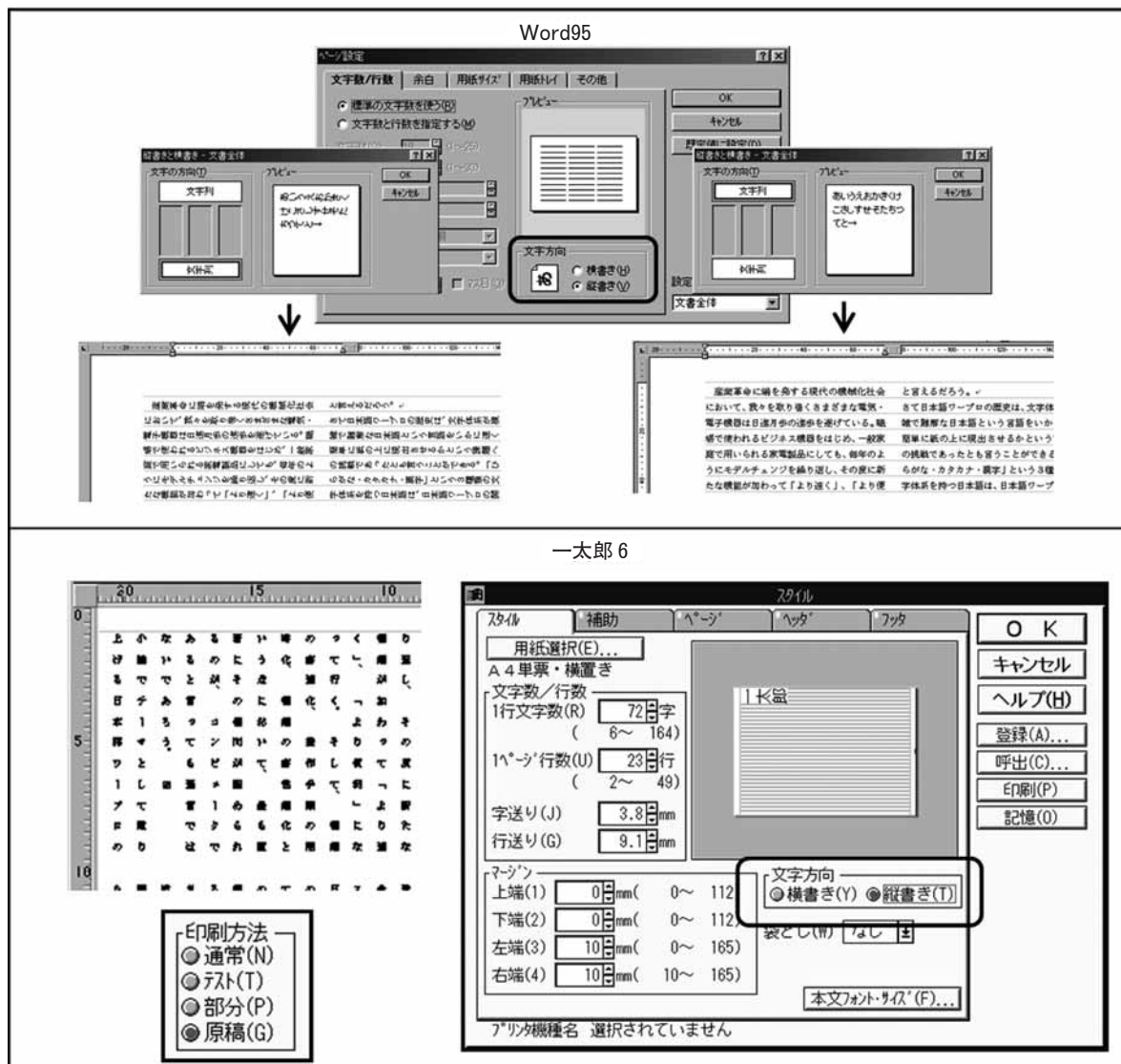
(図12) オートコレクト機能の比較



次に、縦書き機能がどの程度充実しているか、特に原稿用紙を意識した機能であるかを注目してみる。まず、Word95では縦書き指定は可能であるが、グリッド線表示を縦に変更できず文字の表示方向を左90度に傾けるという不自然な書式設定機能となっている。また、原稿用紙機能は備わっておらず、原稿用紙ウィザードを追加でインストールする必要がある。標準搭載するほど重要な機能ではないということであろうか。また、Word95の原稿用紙モードにおいて、文字カウント機能を使って文字数をカウントしようとする、正確な値が得られない。原稿用紙の行に設定されている文字数に行数を掛けた値が表示されてしまう。一方の一太郎6では、文書のスタイル設定の中で縦書き指定をすると編集画面も縦表示となり、手書きと同じ間隔で入力作業を行うことが出来る。さらに、原稿用紙印刷の機能もあり、日本の文書事情にあった編集やレイアウト、印刷がしやすいように設計されていることがわかる。

このように、Word95と一太郎6の間には、メニューやボタン、設定項目から処理結果の表示方法などに、多くの相違点があることが明らかとなった。これらは、英文ワープロの流れを汲んだ英語版 Word に日本語処理機能を追加してきた Word95と、オリジナルのワープロソフトを jX-WORD から作り上げていった一太郎6の開発思想の違いからきているものと思われる。

(図13) 縦書き機能と原稿用紙設定の比較



#### 第4章 機能の差異を生む発想の相違

本章では、前章で比較分析され明らかとなった Word と一太郎との機能面の差異が、開発者のどのような考え方の違いに起因するものかを考えて行くことにしたい。まずはじめに一太郎の開発思想について考察し、続いて Word の開発思想について考察して行くことにする。

##### 4.1. 一太郎に見られる原稿用紙的発想

そもそもワープロが登場する以前、一般に私たち日本人は印刷のための原本を書くためには「原稿用紙」というものを用いていた。原稿用紙には、縦書き・横書きの別を始め、字数や体裁にさまざまな種類があるが、基本的には縦横に罫線が引かれ、一文字に一マスが当てられ、行と行の間に余白がある。この余白は、縦書きの場合には各行の右に設けられ、横書きの場合には各行の上に設けられる。原稿用紙の歴史は古く、松尾(1981; p.30)によれば、「今日のわれわれが眼にすることのできる、しかも今日の意味における文字通り原稿用紙の嚆矢と考えられるものは、おそらく頼山陽が用いた原稿用紙であろう」ということである。頼山陽が有名な『日本外史』を執筆した折に用いた原稿用紙が一枚だけ現存しているそうであるが、『日本外史』の発行は1829年であるから、今か

らおよそ180年前の江戸時代には、既に原稿用紙（縦書き）が用いられていたということになる。もっともこれは当時の極く一部の人が用いたという記録であり、頼山陽の時代に原稿用紙が一般に広く流通していたという訳ではない。上記の頼山陽の原稿用紙も、中央部分に「日本外史」と印刷されており、これが特注品であったことが分かる。

原稿用紙が普及するのは、活字印刷が一般に広まり、大量印刷が商業化され、文筆によって生計を立てる者が多数登場する明治時代以降のことである。頼山陽の時代には、原稿用紙の罫線（マス目）は文字の大きさと配置を整えるためだけに引かれたものであったであろうが、明治以降に文字媒体の印刷物が商業化されたことにより、マス目は文字数をカウントするためにも重要な意味を持つことになった。現代でも、作家や文筆業者への原稿料の支払いは、文字数を基準に行われることが多いらしいが、そのような際に原稿用紙は実に便利であり、容易に文字数をカウントすることができる。このように日本語の書写に関しては、近代は基本的に縦書きの原稿用紙が用いられ、文筆や印刷の分野においては、原稿用紙のマス目の存在が商業的にも大きな意味を持っていたとすることができる。現代においてもこの伝統は続いており、日本語における執筆依頼は、通常「〇〇文字×〇〇行×〇〇ページ以内」というように、原稿分量の上限を文字数で示すのが一般的である。

そして原稿用紙に関して、もう一つ忘れてはならないものがある。それは行間の余白の存在である。縦書きの場合には各行の右に、横書きの場合には各行の上に設けられていることは前述したが、これは専門用語で「ルビ罫」と呼ばれる。この行間の余白は、そもそも漢字の読みを補助的に示すフリガナのためのスペースであった。漢字という表意文字を用いる日本語の場合には、難しい漢字は正しく読めない懸念があるためフリガナを付記する必要が往々にして生まれる。これは、そもそも漢文訓読の作業の中で生まれたものと言われているが、現代の日本語においてもフリガナは必要不可欠なものとなっている。そして、そのフリガナを付けるためのスペースが「ルビ罫」である。このように、日本語の表記においてルビ罫の存在は小さくないものがあるが、現代日本語におけるこのルビ罫の使われ方をよく観察してみると、単に漢字の読み方を示すフリガナを付けるだけではなく、言語的にさまざまな特殊な機能を担っていることが分かる。

たとえば、松本大学校歌（松崎一作詞）には、次のように多くのルビが振られている。

|              |                |              |                |
|--------------|----------------|--------------|----------------|
| ちくまの<br>筑摩野に | あかひのぼ<br>明き陽昇り | そうきゅう<br>蒼穹に | きぼうおど<br>希望は踊る |
| どくりつ<br>独立と  | じしゅ<br>自主の心を   | はぐく<br>育まん   | まなびや<br>この学舎に  |
| つど<br>集い来し   | ともどち<br>われら学友  |              |                |

|               |                   |            |             |
|---------------|-------------------|------------|-------------|
| みすずかる<br>理想の灯 | しなのたかはら<br>信濃高原   | みどり<br>緑なす | あずさ<br>梓の森に |
| りそうひ<br>真理の道を | まこと<br>ひたすらに求め進まん |            |             |
| 夢多く           | かた<br>あつき語らい      |            |             |

|            |               |              |               |
|------------|---------------|--------------|---------------|
| アルペンの      | あかねくも<br>茜の雲に | せいしゅん<br>青春の | おも<br>想いをのせて  |
| はげ<br>励めかし | まな<br>学びの日々を  | いとおしく        | のちしの<br>後に偲ばん |
| 若き日の       | またとなければ       |              |               |

この歌詞に出てくる多くのルビのうち、そのほとんどは漢字の読みを示すフリガナである。「筑摩野」、「蒼穹」などやや読みづらい漢字には、当然のことながらそれぞれ「ちくまの」、「そうきゅう」と振られているが、これらを始め他の比較的読みの易しい漢字にもフリガナが振られている。しかしながら、「学友」には「ともどち」、「真理」には「まこと」と振られており、これは単なる

読み方を示すフリガナではない。「学友」を「ともどち」と読ませ、「真理」を「まこと」と読ませているのである。「ともどち」ならば「友どち」と最初から表記すれば、そもそもフリガナを振る必要も生じないのであるが、作詞者はそれを好まず、「学友」と書いて「ともどち」と読ませたいのである。また同様に、「まこと」も「誠」とすればフリガナがなくとも容易に読める筈であるが、敢えて「真理」と書いて「まこと」と読ませている。日本語においては、このように表記に用いた漢字の素直な読み方ではなく、凝った読ませ方をさせることも可能であり、それが一つの修辞法<sup>レトリック</sup>となっている。このように、単なる読み仮名ではないルビの使い方は、詩歌においては顕著に見られるものであり、これは詩歌においては音数や音の響きというものが非常に重要視されるためだと考えられる。

このように、日本語の表記においてはルビを振るということが頻繁に行われているが、それは単に漢字の正しい読み方を補助的に示すフリガナという機能だけではない。本文に平行して表記される補助的表記としてさまざまな役割を担って、全体として複線的表記を形成していることが分かる。ここで、ルビの持つフリガナ以外の機能について、簡単に見て行くことにしよう。

たとえば、日本語とそれに相当する外国語を同時に表記したい場合、あるいは表記としては日本語があるものの、読ませ方としては外国語の方が一般的で意味を伝え易い場合に、ルビが用いられることがある。「電子計算機<sup>コンピュータ</sup>」、「職業経歴<sup>キャリア</sup>」、「航空郵便<sup>エアメール</sup>」などが、その代表例である。またこのような使い方は、外国語を併記する場合に限らない。ルビとして日本語を振り、一般的な呼び方や俗称を表記したりすることもある。「虫垂炎<sup>モウチョウデン</sup>」、「刑事<sup>デカ</sup>」、「松本大学松商短期大学部<sup>マツシホウダイン</sup>」などである。また、ルビは補足的な情報を伝える機能を担うこともある。「新幹線<sup>のぞみ</sup>」、「音楽プレイヤー<sup>アイポッド</sup>」、「薄型テレビ<sup>プラズマ</sup>」などである。

一般に表音文字しか持たない西洋の言語においては、修辞法は言葉の配列や音韻に関して発達して来たが、こと表記に関しては修辞法はなきに等しい。「すべてを大文字で表記する」、「太い文字を使う」、「凝ったフォントを用いる」などの表記上の強調やアレンジは可能であっても、それが修辞法というレベルにまで発展しているとは言えないであろう。ところが日本語の場合には、表意文字である漢字を用いるだけでなく、「漢字かな交じり文」という独特な表記体系を持つがゆえに、表記の点においてもさまざまな技巧や工夫が発達してきた。そして、ルビというものの存在もまた、その表記上の修辞法<sup>レトリック</sup>の幅を大きく広げることに与しているのである。

さて本節で考察してきた日本語の表記上の特徴が、日本語ワープロ一太郎6の機能にはどのような形で反映されているのであろうか。前章で観察された機能上の特徴を思い返しながらかえて行くことにしよう。

まず日本語を表記する上での基本となってきた原稿用紙の第一の特徴として、「一文字一マス」の原則がある。原稿用紙においては、基本的に一つの文字に対して、一つのマス目が割り当てられる。そしてその各々のマス目は、形が正方形である。すなわち原稿用紙においては、どの文字もがまったく同じ大きさ、しかも縦幅と横幅が同じ正方形に書くことが求められているのである<sup>5)</sup>。これは我々日本人も日常的にはあまり意識しないことが多いが、英語のアルファベットなどにおいては文字の種類により縦幅や横幅がまちまちであることを考えると、日本語の文字がいかに均等な大きさであるかが再認識されるであろう。

この日本語文字の特徴は、一太郎における文字というものの捉え方に如実に反映されている。たとえば「文字拡大」の機能において、そのコマンド選択肢は、「倍角／縦倍角／四倍角」などとなっているが、これは基本となる文字の大きさが、文字種にかかわらず同じ大きさであることが前提となって初めて言えることである。英語のアルファベットのように、文字の種類によって縦幅や横幅がまちまちな場合には、このようなメニュー設定の仕方はできない。このように、一太郎では基本的にはどの文字も同じ大きさであることが前提となっている。そしてこの考え方は、単に文字を

見る時だけではなく、文（センテンス）や文章全体を見る上でも一つの基準となっているのである。たとえば、前章で見たように、一太郎におけるタブ設定の基本設定値が「半角 8 文字（全角 4 文字）」であり、任意設定が「文字単位」なのも、文を文字単位で捉えていることを示している。また、ディスプレイ上でのカーソルの位置を示すための、画面下方の「〇〇ページ、〇〇行、〇〇字」という表示に関しても、このカーソル位置表示における「〇〇行、〇〇字」という捉え方は、全体を文字単位で考えていることの証左であろう。一太郎の初期のバージョンにおいては、倍角にした折には文字数のカウントが 2 文字分になったことは前章で触れたが、これなども原稿用紙のマス目をカウントする伝統の痕跡とすることができる。更には「改行幅設定」において、「1/2改行／1/3改行」などの設定項目が存在するのも、日本語の文字の縦幅が一定であることを前提としている、ということが指摘できるであろう。

#### 4.2. Wordに見られる英文タイプライターの発想

本節を始めるに当たり、まず英語を表記するために長年用いられてきた英文タイプライターについて概観しておくことにしたい。

英文タイプライターの歴史は古く、遠く 19 世紀初めにまで遡る。発明者については諸説あるようであるが、一般にはイギリス人ウィリアム・バートであるとされている。バートは 'Typewriter' という英語を印字する機械を発明し、1829 年に特許を取得した。この 1829 年という年号は、先に触れたように頼山陽が『日本外史』を発行した年であることを考え合わせると、偶然の一致とは言え実に興味深い。英文タイプライターは、日本の原稿用紙とほぼ同じ時に生まれ、ほぼ同じ時代に洋の東西で筆記のための道具として活躍し、ほぼ同時期に書写道具としての筆頭の座をワープロに奪われたのである。

さて英文タイプライターとは、プラテンに装着した紙に活字を印字させる機械であるが、英語のアルファベットがわずか 26 文字であり、その他に数字キーや記号キーを含めてもわずか数十の文字しかないことから、キーボードによる打鍵が可能になったものである。膨大な漢字を有する日本語とは言語環境が大きく異なることは、押さえておく必要があるだろう。この文字数の絶対的な相違が、日本にタイプライターというものが容易に誕生せず、製作されたものも大型で高価な機械で一部の専門職向けにとどまり、一般大衆向けの機械がほとんど製作されなかったことの大きな要因のひとつとなっているからである。

ここで、英語の表記についての基本的なことを確認しておきたい。以下に述べる英語の特徴は他の西洋諸言語とも共通するものが多いが、ここでは日本語との対比という観点から、英語の特徴という形で述べる。まず第一に、英語アルファベットは表音文字である。アルファベットの並びは、発音された英語を一定のルールのもとに書き写している記号列に過ぎない。したがって英語アルファベットの一文字一文字に意味はなく単に音を表しているだけであるから、綴り字が分かれば一般に発音は容易である。第二に、英語は横書きが基本である。一部の広告や看板において店名や社名などが縦書きに表記されることはあるが、文や文章を縦書きにすることはできない。第三に、英語は一つ一つの文字が等間隔に並べられるのではなく、単語ごとに固まり、単語と単語の間には空白スペースを置く。単語の切れ目で改行が行われるのは構わないが、単語の途中で次の行に移行し、一つの単語が切れて行をまたぐことは基本的に許されない。

さてこれらの英語としての特徴から、英語を活字化するタイプライターという機械にも自ずとそれに則した特徴が備わるようになる。まず第一に、英語は表音文字でフリガナを振る必要がないので、ルビ罫は必要ない。ルビに用いる小さな活字も不要である。第二に、英文タイプライターでは横書き（左から右）にしか英語を打てない。縦書きに文を書くことはないから、これで必要にして十分である。第三に、ある単語が行末に来てその行内に収まらなかった場合、その単語を途中で分けてハイフンで繋ぎ、ハイフン以降の部分次の行に送るという処理方法が生まれる。これを、英

語で‘Hyphenation’と言い、日本語では分綴<sup>ぶんてつ</sup>と言う。しかし、単語はどこで分けても良いというものではない。単語の中で分けてもよい箇所とそうでない箇所があり、基本的にはシラブル（音節）の切れ目で分けなければならない。かつての英文タイピストは、ただ速く打つことが出来るだけでなく、単語の分綴法にも通じていることが求められた。できるだけ辞書を使うことなく、単語のシラブルがどこで切れているかを正確に判断できる知識が要求されたのである。

さて本節で考察してきた英文タイプライターの特徴が、英文タイプライターの後継機械となった英文ワープロを経て、日本語ワープロ Word95 の機能にはどのようにその痕跡が残されているのであろうか。前章で観察された機能上の特徴をいくつか取り上げながら考えて行くことにしたい。

まず、英語は表音文字でルビを振る必要も習慣もないため、基本的な書式メニューに「ルビ」の機能が入っていない。Word95では「拡張書式」ツールボックスの中に配置され、ルビを振る機能が利用できるようになっているが、それ以前のバージョンでは、ルビを振ることができなかったようである。Word という日本語ワープロにおいて、ルビの機能がいかに軽視されていたかが窺える。

次に「文字拡大」の機能において、そのコマンド選択肢は、「150% / 200%」などとなっており、「倍角／縦倍角」などの表示ではない。この場合、「150% / 200%」というのは文字幅のことを示しているので、150%ならば横幅が1.5倍、200%ならば横幅が2.0倍に拡大できることになる。これは、英語アルファベットが文字により大きさがさまざまであることから来た表示方法であろう。更に、Word には最新バージョンに至るまで「四倍角」や「縦倍角」は存在しないが、これは文字により高さが一定でないアルファベットを文字体系として持つ英語からの発想として、縦幅を調整するという考え方が生まれなかったものと考えられる。

次に、Wordにおけるタブ設定の基本設定値が「15ミリ」であり、任意設定が「ミリ単位」なのは、ディスプレイ上に表示される文字列を画面の中のひとつの記号の存在というような感覚で捉えていることを示している。これに関連して、カーソルの位置表示にしても、Wordでは「〇〇行、〇〇列」と表示され、一太郎のように文字数をカウント基準としたものではない。カーソル行にある文字を拡大すれば、カーソル位置としての表示に変化が起こる。このように Word においては、文字列をも単なる記号の連続体として扱っている考え方が濃厚に窺える。それは Word がそもそも扱っていた英語という言語の文字体系が、表意文字ではなく表音文字であることと深く関係しているに違いない。この考察を更に進めて作図機能について考えてみると、Wordにおいてはモードの切り換えなしに描画が可能である。文字の入力モードからそのまま描画に移ることができるし、描画をしながら同時に文字を打ち込むこともできるのである。これは、Wordにおいては文字と図形というものが比較的似通ったものとして捉えられていることを暗示している。これに対して一太郎では、作図をするには描画モードに切り換える必要があるし、描画中には文字を入力することはできない。これは最新バージョンに至るまで続いている特徴であり、Word との間に認められる大きな相違点の一つとなっている。また「改行幅設定」において、ピクセル単位で設定が可能なのも、英文タイプライターがプラテンの微調整で細かく改行幅を変えられたことと深く関係しているように考えられる。

また「字間ピッチ」という考え方も一太郎 には見られなかった機能であり、Word に特徴的なものである。「字間ピッチ」というような文字間隔の調整という発想は、原稿用紙のようなマス目を埋める書写方法からは生まれる筈もなく、やはり英文を横書きに表記する中で行末揃えの必要から生まれて来たものに違ひなからう。英文タイプライターの時代には、アルファベットでも一文字当たりの横幅は決まっていたので、行末揃え(Justification)は不可能であった。そこで、やむなく分綴法というものが発達したことは先に述べた。しかし、ワープロの時代になって、行末揃えが可能となり、字間を調整して行末を揃えるという技術が生まれる。ある行の行末になって、最後の

単語がその行に収まりそうもなくなった場合、英文ワープロでは行送り(Word-wrap)によるか、行末揃え(Justification)によるかして右端をできるだけ揃え、美しい文書を作ろうとした。英文タイプライターの時代と違い、分綴法(Hyphenation)によって行末を調整する必要がなくなったのであるが、そのために必然的にJustificationの必要が生じるようになったのである。そしてそのJustificationに必要な技術が、字間ピッチの調整であった。Wordという日本語ワープロに「字間ピッチ調整」という機能が具備されているのは、やはりWordがもともと英文ワープロであったことの名残であろう。

またWordでは初期のバージョンからルーラーが装備されていたことは前章で触れたが、この機能なども行末揃えに敏感であった英文タイプライター時代の痕跡であると考えられる。英文タイプライターには、プラテンの前に必ずルーラーが設置されており、紙幅に合わせたマージンの設定なども細かくできるようになっていた。そして各行において行末が近づくと、それを知らせるために行末数文字前には必ずベル音が鳴るようになっていたものである。Wordに初期から装備されたルーラーは、英文タイプライターのルーラーがそのまま引き継がれたものと考えて間違いのないものと思われる。

## 第5章 日本語ワープロの比較文化論

これまでに見てきたように、同じ日本語ワープロと言っても米国で開発された英文ワープロをベースにしたものと、日本で独自に開発されたものには、一見同じように見えるさまざまな機能においても、細かい点で違いのあることを認めることができた。そしてその違いは、単に表面的な違いではなく、開発の経緯やそもそものルーツというものが深く関係していることを検証することができた。

欧米でのタイプライターに始まる活字化機械の発達史を振り返ってみると、それは産業革命に端を発する機械化の系統的な歴史そのものを踏襲していることが分かる。すなわち、[手書き] → [手動タイプライター] → [電動タイプライター] → [英文ワープロ] という一連の流れは、[手作業] → [機械化] → [電氣化] → [電子化] というプロセスを順にたどっている<sup>6)</sup>。一方、日本語については、その複雑な文字体系ゆえに和文タイプライターが大型で高価なものにならざるを得ず、そのユーザが一部の専門職に限られて一般に普及することがなかった。そのために、[タイプライター] という段階をほとんど経ずに一気に[手書き] → [日本語ワープロ] という進行の仕方をしたのである。これは、[手作業] → [電子化] という革命的な変化であり、原稿用紙が電子化されたと言っても過言ではないかもしれない。そのため、この急激な文字入力手段の変化は、一部に「ワープロアレルギー」や「ワープロ反対論」を巻き起こした。古瀬(1990)によると、日本語ワープロの発売当初は、「日本語を壊す気か」とさえ言われ、製造メーカーが非難の矢面に立たされることも少なくなかったと言う<sup>7)</sup>。

日本語ワープロの製作プロセスにおいては、第2章で詳しく見たように大別して二つの流れを認めることができた。ひとつは、技術的に先行していた英文ワープロをベースとして、それに日本語を載せ換える形でプログラミングしたもの。そしてもうひとつは、日本語ワープロ専用機が持つ機能をPC用に最適化し一から作り上げたものである。前者の代表がWordであり、後者の代表が一太郎である<sup>8)</sup>。

第一章でも触れたように、日本人ユーザにとっては必ずしもWordは使い易いものではないらしく、そのシェアが高いにもかかわらず、Wordへの不平や不満は一太郎に比べ多く耳にするとところである。実際に『Wordアレルギー解消マニュアル』なる本も出版されているし、下記のようにWordに対する不満が書かれたサイトも存在する。



「罫線が書きにくい。／バランス修正に難がある。特に一度打ち込んだ文章の後部に付け加える際、行を変換後は無理な場合が多数。／表作成後のバランス修正に癖が強く必要に応じた追加などの変更が簡単にはできない。／表を作成後、枠内の一部分に再び枠を作成する際細かい修正が不可能。若干の隙間がどうしても空いてしまう。」

(出典：[http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft\\_Word](http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft_Word))

これらの不満すべての原因が、英文ワープロをベースに開発したための発想の違いに起因するという訳ではなく、単に技術的な問題が原因であるものもあるであろう。けれども、「罫線」に関する不満などは、もともと英文ワープロに罫線という概念がなく、日本語ワープロとしての Word を開発する時点で付け足した機能であることを考えると、日本語における原稿用紙や罫線の意味を開発者が十分に理解していなかったことに、その原因を求めることができるのではないだろうか<sup>9)</sup>。それにしてもこのようにユーザからの不満が多く聞かれるということは、Word が日本人にとって根本的に馴染みにくい要素を多分に内包しているワープロソフトであると言って間違いのないであろう<sup>10)</sup>。

現在、同じく日本語ワープロソフトである Word と一太郎に機能面での大きな差異は認められない。それはお互いがライバル商品としてバージョンアップの度にお互いの機能を取り入れたり、改善してきた結果であろう。しかし、それでも細かい点を見てみると、そこには英文ワープロをベースに開発されたものと、日本語の原稿用紙からスタートしたものとの違い——機能における発想の相違——を認めることができることは、小論において細かく検証してきた通りである。そしてそれは、揺籃期のバージョンにおいてかなり顕著に認められるのであるが、中にはその基本的な発想の痕跡が最新バージョンに至るまで根強く残っているものも存在する。現在私たちが日常的に使う日本語ワープロソフトにも、そのルーツゆえの異文化が潜んでいるのである。

## 注

- 1) PC用日本語ワープロ市場における一太郎から Word へのシフトは、各ソフトのヘルプメニューからも窺い知ることが出来る。Word の初期のいくつかのバージョン (Word5、Word2000、Word2002) には、ヘルプメニューの中に「一太郎ヘルプ」が存在していたが、最近のバージョンからは消えており、逆に一太郎2008以降のバージョンには、 (Word 文書として保存) ボタンが追加されている。
- 2) 日本語ワープロ専用機には、当初からルビ機能を搭載したものが多かった。たとえば、1980年代に発売されたシャープ WD-2000 (1984年) や WD-1800 (1989年) などの書院シリーズでも、既に基本機能としてルビ機能が装備されていた。
- 3) ルビ機能が初めて搭載された Word95では、「フリガナ」と表記されたボタンであったが、Word 2000～Word2003のバージョンでは、ルビ機能を呼び出すためのボタンが、 のように「大文字のAの上に、小文字のabcが乗っている」イラストに変わった。このため、日本人ユーザはこれがルビのボタンだと気づかないことも多かった。Word 製作者が、日本語におけるルビ (フリガナ) というものの本質をよく理解していなかったために起こったエピソードだと言える。
- 4) 『Word アレルギー解消マニュアル』(p.8)には、「一般的にオートコレクトの評価は芳しくありません。ユーザとしては、入力したとおりに表示されて欲しいのに、そうとなってくれない、というのが一因のようです。」という記述が見られる。日本人ユーザにとっては、オートコレクトは却って煩わしい機能だと思われる傾向の強いことが窺える。

- 5) ただし、促音「っ」や、拗音「きゃ」「しゅ」「ちょ」などにおける「ゃ」「ゅ」「ょ」など、日本語の文字体系の中でも例外的に大きさが異なる文字が一部存在する。
- 6) 厳密に言うと、英文タイプライターから英文ワープロに移行する直前に、英文タイプライターが電子化された時期があった。1970年代に電動タイプライターにバッファメモリを搭載した電子タイプライターが登場したのである。しかしながら、生産された機種が限られ、流通した期間が短期間であり、その後ほとんど英文ワープロが登場したことから、一般には「電動タイプライター」→「英文ワープロ」の移行が「電気化」→「電子化」と捉えられることが多い。
- 7) 古瀬(1990)は、「東芝 JX-10 の発売当時、開発者はあちこちで『ワープロは日本語を破壊しないか』という批判を受け、そのたびに『逆じゃないか』と反論しなくてはならなかった」という主旨のことを述べている。
- 8) ジャストシステムは一太郎の開発にあたり、ワープロ専用機の動きをPC上で真似させるものではなく、専用機のキーボードよりも少ないキーのキーボードを使うPC上で如何に質の高い日本語処理を行わせるかを旨として開発を進めていたようだ。たとえば、コマンド実行時に手元から遠いファンクションキー（機能キー）を使わずにホームポジションに近いキーにコマンドを割り当てるアイディアや、上下の視線移動を最小限に抑えるためにESCキー押下で表示するメニューをモニタ最下部に配置するアイディアなど、ワープロ専用機にはないPCに適したインターフェース設計を行っている。なお、一太郎は1985年に「日経・年間優秀製品賞」を受賞している。
- 9) 松尾（1981；p.27）には、「『野』という字は、古くは『畦』とも書いたようである。『畦』は田の『あぜ』のことで、形が似ているところからであろう。」という記述がある。これが真実ならば、野線というものが日本の伝統的な生活文化に根ざしたものであることが語源的にも裏付けられる。
- 10) Wikipedia には、Word に対するユーザの批判や不満が列挙された後、「これらが原因で文筆業者や脚本家は Word を敬遠し、一太郎など他のワープロソフトを使用している場合もある。（中略）なお、Word は元々が英文用文書作成機能に特化した製品であり、その目的から外れる機能については競合製品に劣る点が多い。」という記述が掲載されている。

## 引用文献

- 五十嵐紀江（2009）『Word アレルギー解消マニュアル』 秀和システム  
 松尾靖秋（1981）『原稿用紙の知識と使い方』 南雲堂  
 松崎一作詞「松本大学校歌」平成22年度 松本大学／松本大学松商短期大学部 入学式リーフレット  
[http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft\\_Word](http://ja.wikipedia.org/wiki/Microsoft_Word), (閲覧日：2010年5月5日)

## 参考文献

- 内山和也(2003)「振り仮名表現の諸相」；『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』Vol.51  
 紀田順一郎(1994)『日本語大博物館－悪魔の文字と闘った人々－』 ジャストシステム  
 金田一春彦(1988)『日本語（下）』 岩波書店  
 鈴木孝夫(1975)『ことばと社会』 中央公論社  
 高橋範夫（1995）『ジャストシステム－「一太郎」を生んだ戦略と文化－』 光栄

- 武田徹 (1995) 『メディアとしてのワープロ－電子化された日本語がもたらしたもの－』 ジャストシステム
- 根来龍之・徳永武久 (2007) 「仕組みの過剰自己強化と意図せざる結果  
－一太郎と Word の攻防を事例とした研究－」；『経営情報学会誌』 Vol.15
- 古瀬幸広 (1990) 『考える道具－ワープロの創造と挑戦－』 青葉出版
- 堀内かほり (2006) 「松－事実上最初のパソコン用日本語ワープロソフト」  
<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20060609/240537/>, (閲覧日：2010年5月5日)
- 情報処理学会歴史特別委員会「コンピュータ博物館」  
<http://museum.ipsj.or.jp/index.html>, (閲覧日：2010年5月5日)
- Daniel Eisenberg (1992) “HISTORY OF WORD PROCESSING” *Encyclopedia of Library and Information Science*, vol. 49, pp.268-278 Marcel Dekker, Inc. NY. USA.